

# 博士学位論文審査要旨

2008年1月25日

論文題目：「日帝下韓国キリスト教社会運動研究」

学位申請者：李 致萬

審査委員：

主査：神学研究科 教授 原 誠

副査：神学研究科 教授 森 孝一

副査：神学研究科 教授 水谷 誠

要 旨：

論文申請者は、韓国・長老会神学大学大学院修士課程で学び（牧会学修士）、修了後、同志社大学大学院神学研究科の特別学生、続いて同志社大学大学院神学研究科博士課程（前期課程）（神学修士）をおえて、後期課程で学んできた。

本論文は、儒教的伝統社会が崩壊し、民族社会が侵略に直面した時期に韓国において受容されたキリスト教が、韓国の民族運動とどのように関わったかを歴史的に考察したものである。その歴史的性質は、他のアジア諸国がキリスト教の欧米によって植民地化されたのに対して、韓国の場合は、非キリスト教国である日本によって侵略された。先行研究において、これを踏まえて韓国のキリスト教は、その当初から「民族教会」であった。これを主唱したのが韓国キリスト教史研究の第一人者である閔庚培である。他方、日本の植民地化に抗して成立した民族運動が主であって、その一部としてキリスト教が関わったという韓圭茂の指摘もある。

論文申請者は、このような先行研究の成果を踏まえて、本論文において抗日民族運動を遂行する過程で「近代志向」と「社会変革」にキリスト教が深く関与したという問題提起を行おうとした。すなわち、キリスト教と民族運動が、個別の次元の問題として論じられるのではなく、相互に深く関与し合った複合的問題であり、それを歴史的に、また社会構造的に総合化して問題を把握すべきであるとの視点を提示したのである。そのため、申請者はキリスト教社会運動における人的ネットワークの実態を解明し、キリスト教社会運動の展開過程とその志向点を明らかにしようとした。

このような課題と方法論に基づいて、本論文は、第1章において、韓国キリスト教社会運動の前史として当時の韓国社会の構造を明らかにし、キリスト教に入信した知識人と彼らと深く関わった独立協会について述べ、キリスト教社会運動の基本的理解と体系とされた「キリスト教文明開化論」を説明した。

第2章では、愛国啓蒙活動とその展開としてのキリスト者の果たした役割を分析し、キリスト教社会運動の基礎の上に形成された多方面にわたるネットワークを考察した。

第3章では韓国キリスト教史上、とりわけ日帝下の宗教運動として重要な歴史的出来事として

知られている大復興運動の展開の様相と歴史的特質について説明し、第4章では、韓国民族主義運動にとって重要な事件である「105 人事件」を取り上げ、これと「新民会」との関係論じ、第5章で、韓国近代史上、もっとも重要な「三・一独立運動」におけるキリスト者の活動や役割を取り上げた。これは天道教や仏教とともにキリスト教がもっとも大きな役割を果たしたことで知られているが、本論文では、キリスト教を民族運動の連続性と同一性という新しい視点で分析しようとした。

第6章では、「文化統治」以後のキリスト教社会運動の陣営の人的、思想的再編について論じ、第7章において、社会主義運動の陣営の側からのキリスト教批判と、これに対応するキリスト教の対応や、社会理論について説明した。

そして終章において、総括的に、韓国に於けるキリスト教社会運動が、キリスト教の社会的存在の様相と現実社会との間において「創造的緊張が生じた時に形成・展開され、これらは特定の人的ネットワークを中心に理念的志向の連続性・同一性を伴って展開されたことを指摘し、これらのキリスト教社会運動が日帝との軋轢を回避しようとした欧米、ことにアメリカ宣教師団の非政治化路線があったにもかかわらず、その歴史的役割を果たしたことを述べた。

以上、本論文は、先行研究の成果を十分に踏まえ、加えて日本と総督府、韓国側資料とアメリカ宣教師団資料などの膨大な資料を用いて分析することにより、日本帝国主義下の韓国の歴史的文化的状況における民族運動とキリスト教の関係を歴史的、神学的に分析することに成功しているという点で、本論文は極めて優れた業績といえる。

よって、本論文は、博士（神学）（同志社大学）の学位を授与するにふさわしいものであると認められる。

## 総合試験結果の要旨

2008年1月25日

論文題目：「日帝下韓国キリスト教社会運動研究」

学位申請者：李 致萬

審査委員：

主査：神学研究科 教授 原 誠

副査：神学研究科 教授 森 孝一

副査：神学研究科 教授 水谷 誠

要 旨：

上記審査委員は、2008年1月23日(金)、13時から約2時間にわたって上記学位申請者に対する試問審査を行なった。学位請求論文に対する質疑応答に関しては、申請者から適切な応答と説明がなされ、本論文の学術的価値が確認された。また、申請者、本論文の背景および土台となる韓国キリスト教史、日本キリスト教史、またカナダ宣教師団に関わる英文資料の解説、加えて深い神学的知識を有することも認められた。語学試験(英語、日本語)においても、十分な学力のあることが認められた。

よって、総合試験の結果は合格であると認める。

## 博士學位論文要旨

論文題目： 日帝下韓国キリスト教社会運動研究

氏名： 李 致萬

要旨：

韓国キリスト教及びキリスト者は、韓国近代史における少なからぬ役割を果たした。このようなキリスト者の役割に対して、従来の研究は韓国近代史におけるキリスト者の貢献を「キリスト教」と「民族運動」との関係に重点を置き、「民族教会論」や「キリスト教民族運動論」、あるいは「キリスト教民族主義」などに具体化された。これに対して、本稿は従来の研究を受け継ぎながらも一歩進んで、「キリスト教」と「社会変動」との関係に重点を置いた「キリスト教社会運動」の視座として捉えようとした。言い換えれば、本稿は韓国近代史におけるキリスト者の民族運動への参加に注目しながらも、それをキリスト教的アイデンティティによるものとして認めた上で、さらにそのキリスト教的アイデンティティの典拠を、近代韓国の社会変動を誘発したキリスト教の社会構造的条件下から導き出そうとしたのである。このような視座をもってキリスト教の社会運動の展開過程を要約・分析すれば、次のような特質を挙げることができる。

1) キリスト教社会運動はキリスト教の社会的存在様相と現実社会との間に「創造的緊張」が生じた時に形成・展開された。

まず、キリスト教社会運動は伝統的儒教社会との緊張状況の下で、近代的開化運動として現れた。韓国においてキリスト教が伝来された時期は、儒教的両班官僚社会としての封建体制の限界が露呈され、新しい時代精神が切に必要になっていた。このような時代的背景の下で、キリスト教は儒教理念を置き換える近代精神として認識されながら、儒教的伝統社会との緊張を形成した。ここに、いわゆる「キリスト教文明開化論」が登場した。「キリスト教文明開化論」は韓国社会の文明開化のために、物質文明の開化、政治社会の開化、精神文化の開化が必要であると主張し、知識人層に積極的に受け入れられた。このような背景の下で、知識人の入信ラッシュが起こった。

1905年の乙巳保護条約によって国権喪失の危機に直面すると、韓国社会では「抗日義兵抗争」と「愛国啓蒙運動」などの国権回復運動が展開された。特に、「キリスト教文明開化論」に影響を受けていたキリスト者達は、「教育啓蒙」と「殖産興業」を主唱した愛国啓蒙運動に積極的に参加した。その中でキリスト者は教育啓蒙運動及び学校設立運動に多大な貢献をした。

次に、日帝の植民地支配が本格化すると、キリスト教社会運動は植民政府との緊張関係を形成しながら、抗日愛国運動として現れた。1910年の韓国併合以来、日帝が武断統治に基づいた政治的抑圧・経済的収奪・民族文化抹殺を画策するにつれ、韓日間の民族的矛盾は極まった。これに対して韓国社会は全民族的抗日運動である三一運動を展開し、日帝の武断統治に抵抗した。キリスト教は天道教・仏教と共に、三一運動の胎動段階から全国的拡大に至るまで主導的に参加した。

このようなキリスト者の抗日民族運動への参加は、基本的に植民地統治下における民族意識の高揚に基づいたものでありながら、一方では、キリスト教と日帝との間の社会的緊張によるものと見なされる。例えば、「105人事件」をめぐる問題において、総督府はこの事件を通してキリスト教をけん制しようとした。結果、キリスト者の総督府に対する反感は高まっていった。言い換えれば、三一運動におけるキリスト者の積極的参加は、「105人事件」を期して高まっていたキリスト者の総督府に対する反感が大きく作用したのである。

最後に、キリスト教社会運動は社会主義との緊張関係により、キリスト教社会談論及びキリスト教農村運動などで現れた。1920年代を前後して、社会主義が流入し、知識人・青年層を中心に急速に広まった。一方、かねてから近代的開化を導いてきた韓国キリスト教は、時代の変化に添うことなく、社会変化を主導した内実を失ってしまったのである。このような状況の下で、社会主義者はキリスト教を「帝国主義者の走狗」・「人民の阿片」として規定し、反キリスト教運動を展開した。

これに対して、当初のキリスト教の反応は、社会主義陣営の批判を肯定的に受け止め、キリスト教と社会主義の社会的連帯を模索するものであった。しかし、社会主義陣営のキリスト教批判が次第に激しくなると、教会指導層と保守的キリスト者たちは、社会主義陣営のキリスト教批判をキリスト教に対する誤解と無知によるものとして認識し、社会主義者の攻撃に反駁しはじめた。一方、社会運動や民族運動に参加したキリスト者グループは、社会主義者のキリスト教反対運動に対して自己反省の契機として受け入れた。そこで、彼らは「キリスト教社会主義」、「社会福音」などを提唱しながら、キリスト教の社会談論に積極的に取り組んだのである。例えば、YMCAを筆頭としたキリスト教の社会運動陣営は、社会主義者の言う無産階級の社会問題に共感しながらも、それに対する具体的実践としてはキリスト教の社会談論に基づいた農村啓蒙運動を展開したのである。

2) キリスト教社会運動は特定の人的ネットワークを中心に、また理念的志向の連続性・同一性を伴って展開された。このようにキリスト教社会運動は、主に西北地域のキリスト者の人的ネットワークと京畿地域のキリスト者の人的ネットワークとを中心に行われた。両陣営は、時にはけん制し、時には協力しながら、キリスト教社会運動を主導的に導いた。

西北地域は儒教的社会秩序において政治的差別と社会的差別を受けたので、両者の存在と儒教的秩序が比較的微弱であった。キリスト教の伝来に際して、西北人はキリスト教の万民平等のメッセージと宣教師の自由な職業観に大きく鼓舞された。結果、長老派の主な宣教地であった西北地域は、キリスト教の勢力において他地域を圧倒し、当時韓国キリスト教の約 70%に達するものであった。つまり、西北地域の長老派は韓国キリスト教の主導的な勢力になったのである。

一方、京畿地域はメソジスト派の主な宣教地であったが、西北地域に比べてキリスト教の勢力は微弱なものであった。しかし、京畿地域が朝鮮王朝の中心部であったことから、この地域のキリスト教は知識人や官僚など、社会指導層を中心に形成されていた。また、この地域のキリスト者は近代的開化のために入信した人物が多かったので、彼らはキリスト教を通じた社会変動を目指していた。それ故、この地域のキリスト者は少数であったとしても、社会運動への参加は西北地域に劣らずに積極的であった。また、京畿地域のキリスト者の主流はキリスト教を通じた近代的開化を図っていたので、キリスト教社会運動においても主要な勢力であった。

次に、キリスト教社会運動は理念的志向の連続性・同一性を持っていた。最初、キリスト教社会運動を胎動させたのは「キリスト教文明開化論」であった。「キリスト教文明開化論」はキリスト教の倫理意識をもって文明開化への社会変動を成し遂げるという見解であった。これは儒教の理念的限界に対する批判と同時に、「新教育」を通じた社会改革の意味を含んでいた。このような理念的志向は国権喪失の危機に直面して、実力養成論に発展した。つまり、国権喪失の危機の原因は、日本に比べて近代的開化が劣っていたからであり、これを克服するためには「教育振興」及び「殖産興業」を中心とした、国家の実力を養成しなければならないということである。実際に、このような主張は愛国啓蒙運動において学校設立運動や教育啓蒙運動として実現された。その後、実力養成論はキリスト教社会運動の最も主要な理念的志向であった。

要するに、キリスト教社会運動はその全過程に渡って、韓国社会の変動と改革を志向し、実践した。「キリスト教文明開化論」は韓国社会に新文明の開化を主導したし、愛国啓蒙運動期には学校設立運動及び教育啓蒙運動など、新教育の普及を通じた社会改革に邁進した。このような理念的志向は、植民地支配が本格化すると実力養成論に発展し、抗日愛国運動路線の主要な軸となった。つまり、キリスト教社会運動の理念的志向は「キリスト教文明開化論」から実力養成論へ継承・発展しながら、連続性・同一性を堅持したと言い得る。

3) キリスト教社会運動はそのほとんどが教派教会の組織と独自に行われた。すなわち、キリスト教社会運動は教派教会が中心になったというより、キリスト者を中心とした社会団体や秘密結社、また YMCA・YWCA などの「包括的キリスト教団体」を中心に行われた。キリスト教社会運動が教派教会から外れた理由は、韓国キリスト教の政治

色排除の結果であり、キリスト教の政治色排除が始まったのは初期大復興運動からであると見なされる。

韓国キリスト教の初期大復興運動は、韓国キリスト教の新しい信仰様態を形成し、キリスト教信仰の定着と量的成長のきっかけとなったが、個人の内面的体験の強調はキリスト教会の非政治化を促進する結果となった。一方、大復興運動は韓国キリスト教のリーダーシップを変えた。すなわち、従来は社会的名望のある信徒が教会の与論を主導したが、大復興運動以後は宗教的リーダーシップのある教職者が主導するようになった。言い換えれば、韓国キリスト教は大復興運動の以後、教職者中心の非政治的性格をおびる公的教派教会と、一般信徒中心の社会運動に積極的な「包括的キリスト教団体」とに二分化したのである。

要するに、キリスト教社会運動は韓国キリスト教界の全体の運動ではなく、「包括的キリスト教団体」に偏重した運動であった。その理由は、初期大復興運動を経ながら、韓国キリスト教は非政治化に傾き、またそれによって非政治的性格の公的教派教会と、社会運動に積極的な「包括的キリスト教団体」とに二分化したからであった。特に、韓国キリスト教の政治色排除は、キリスト教社会運動の消滅に間接的影響を与え、また、太平洋戦争期において韓国キリスト教の戦争協力の原因となった。